

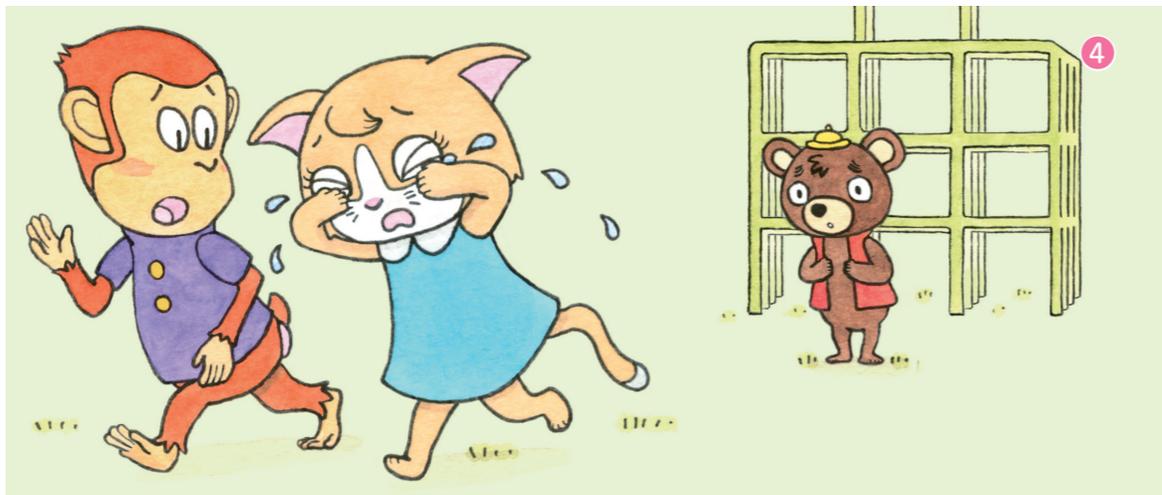


ジャングルジム

あなたは、みんなと
なかよく
できているかな。



11
すきらいを
しない





へんしゅういいんかいさく ◆ やましたこうへい 絵



5 そのじぎの日

かんがえよう・はなしあおう
だれとでも なかよく
することについて、
考えましよう。

- 2で、くまさんは、どんな気持ちで「ねこさんは、ちがうところであそんでよ。」と言ったのでしょうか。
 - ◎ 4で、くまさんは、どんなことを思っていたでしょう。
 - 6では、みんなで なかよくあそんでいますね。
 - 5で、どんなお話をしましたか。お話をしましたからだと 思いますか。
- くまさん、さるさん、ねこさんになって、えんじてみましょう。





祖母のりんばい

本当にいやになる。今度は私のお気に入りのひざかけをぞうきんだと思って、そうじに使っていた。この前は、洗っておいた私の水とうに、どこからかつんできた花が生けてあった。

「もう、なんなの、おばあちゃん。私の物を勝手にいじらないで。これが何かも分からないの？」

私は、すっかりよごれてしまったひざかけを手に、祖母につめ寄った。こんなことを言ってもむだなのは分かっているけれど、が

まんがでできなかった。

祖母は、私の大きな声に、おびえたような顔をして体を引いた。そこへ、父が入ってきた。

「お母さん、どうしたの。さあ、部屋にもどろうか。父を見て、ほっとしたような顔になった祖母は、
「はいはい。」

と言うと、父に連れられ、部屋へもどっていった。祖母は変わってしまった。なんだか同じことをくり返す話すようになったな、と思っていたら、すぐにいろいろなことが分からなくなってしまう。私のことも、父や母のことも、そして自分のことも。

たまに元の祖母にもどることもある。まるで、何かの回路が繋がったみたい。

父がもどってきて、私の目を見つめて言った。

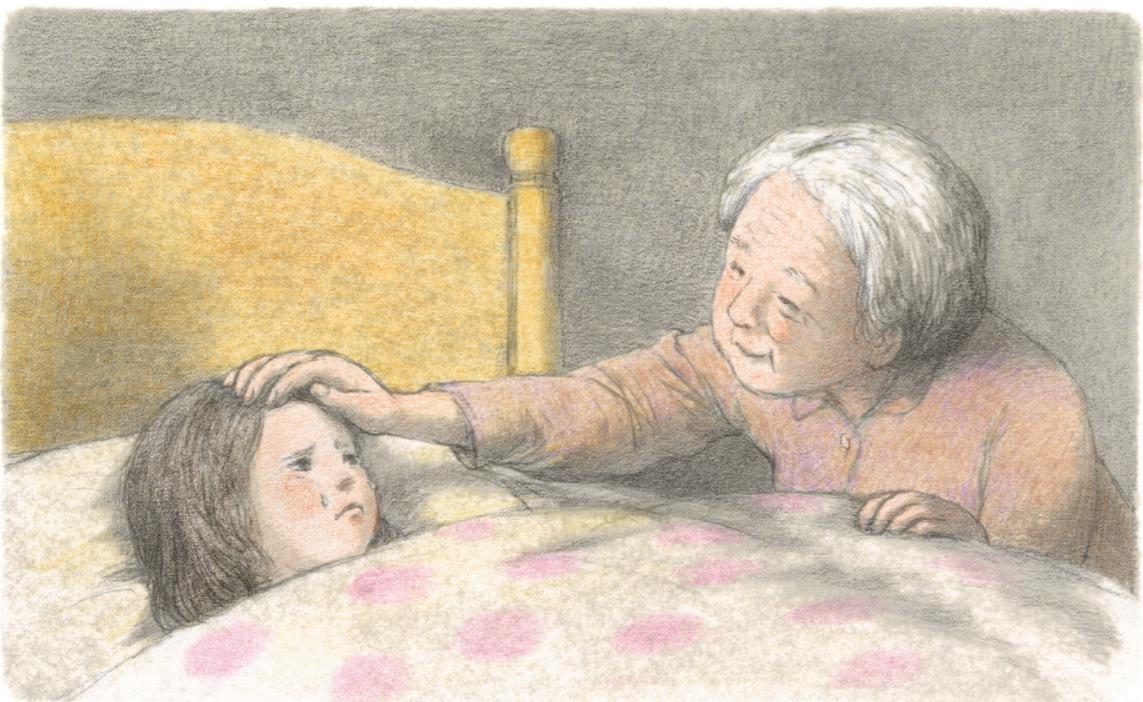
「朝子、悪かったな。でも、分かってほしい。たとえば、お父さんのことが分からなくなってしまうても、おばあ



15
進んで家族の役に立つ



おんせい▶



編集委員会作 ◆ 岡田千晶 絵

「ちゃんはお父さんのお母さんなんだ。」

私は、父の言葉に、何も言えなかった。

ある日、私は熱を出し、学校を休んだ。

自分の部屋でねっていると、祖母が部屋に入ってきた。私は祖母を無視しようと思った。相手なんてしてられないくらいつらいのだから。ところが、

「朝子、どうしたの？ 熱が出たのかい？ まあまあ、かわいそうに。温かくしているんだよ。」

そう言って、私の頭をなでてくれた。

「さあ。朝子の好きなりんごをすってきてあげよう。熱があるときは、あれがいちばんだからね。」

そこにいたのは、昔のままの祖母だった。私は、いっしゅんで、自分が小さかったころのことを思い出していた。やさしかった祖母。よく二人で手をつないで散歩に行った。季節の花がさくたびに、その名前を覚えてくれた。熱を出した私のために、よくりんごをすってくれたっけ。

私は、なぜだか、なみだが止まらなかった。

「おやおや、朝子、どうしたの。つらいのかい？」

「うん。おばあちゃん、だいじょうぶだよ。私、早く元気になるよ。そうしたら、今度は私の番

だからね。」

祖母は、やさしく、私にほほえんでくれた。

考えよう・話し合おう



「祖母のりんご」から見えてくる家族とは、どんなものだろう。

- 「朝子、悪かったな。（中略）おばあちゃんは、お父さんのお母さんなんだ。」（1ページ26行目〜2ページ1行目）と、父から言われたとき、「私」は、どんなことを思ったでしょう。
- ◎「今度は私の番だからね。」という言葉には、「私」のどんな思いがこめられているでしょう。

つなげよう



君は、家族のために、どんなことができるかな。